

——1975年～1989年——

京都女子大家政 紀 安子

目的 我々の生活の中にはさまざまな色が使用され、被服の色彩だけでなく、インテリアや日用品の色彩選択も多様化している。被服について言えば、色の嗜好性は社会的制約を受けながら、着用者の意識や生活行動、流行、性格によって異なるものと考えられる。本研究の目的では、1975年から1989年間までの14年間の流行の変化や、色彩が実際にどう用いられ、その嗜好がどう移り変わっているかを定量的に確認し、色の変化の規則性を探りだすことである。また、性格と色彩の嗜好性との関連についても把握し、考察を試みた。

方法 調査対象は18～22歳の女子大生で、調査は1975年から1989年の14年の間に、2～3年間隔に調査を行った。調査を行った年次と人数は、1975年 100名、1977年 90名、1979年 129名、1981年 110名、1982年 90名、1987年 197名、1989年 120名の計7回（7年次）延べ 868名である。いずれの年次も11月末日に質問紙法による調査を行った。試料は、色研式色票50色を用いた。調査内容は、被服の6服種、セーター、スーツ等と、インテリア、日用品等の12品目について使用したいと思う色を何色でも選択させ、好みの順位を調査した。同時に被験者の「好きな色」「嫌いな色」と性格調査（Y・G法）を行った。本報では、被服の服種別嗜好と性格との関係を単純集計、因子分析、クラスター分析により検討したものを報告する。

結果 1975年から1989年の7年次における全服種と品目の嗜好色のトップの色相は、服種別に色彩選択の領域に異なりがみられた。セーターの色相は、流行色と関連し同傾向を示した。セーターに使用するトップの色と「好きな色」と性格の情緒性について、クラスター分析を行ったところ1977年では、情緒安定の人は暖色を好み、不安定の人は青や紫を好む傾向があった。